謝辞——鈴木教授の御退官にあたって

藤岡貞彦

たいへん僭越ではありますが、鈴木先生の創設されました教育社会学講座の一員といたしまして、教育と研究のうえでの先生の積年のご労苦にたいし、一言、おん礼の言葉をのべさせていただきたいと存じます。

鈴木秀勇先生は、このたび教授停年制規程により、一橋大学を退官されることとなりました。先生の足跡とご業績はあまりにふかくまた長く、先生ご退官後の空隙の大きさに、私たちはただただじろぐばかりであります。

先生は、東京商科大学をご卒業ののち、昭和二十一年三月東京産業大学常勤講師となられて以来、実に三十八年のながきにわたって一橋大学における教育学・教育思想史の研究と教育のために尽くしてこられました。この間、昭和二十六年一橋大学社会学部助教授、同四十年社会学部教授となられ、前期、後期、大学院において、社会科学概論、教育史、教育思想史等の講義および演習を担当され、これらの分野の研究と教育指導に心をくだかれました。

先生が商科大学予科へ入学された昭和十三年以来の四十余年は、日本にとっても一橋にとっても激動の時代でありました。一橋大学の名が確定したのは昭和二十四年、先生が奉職されてから三年目のことであり、先生は社会学部の創設にもっとも若いメンバアとして参画されたのであります。敗戦後の日本の再建が、日本人すべての課題であったとき、先生がひろい社会思想史の研究から、すすんで教育思想史の分野にすすまれたことを、私たちは特段に意義ふかく思うのであります。社会学部の創設

者たち、上原専禄先生、高島善哉先生らが、御専攻の領域を越えてひろく日本の教育に提言しはじめられたころ、すなわち、大学の再建と日本の再建が一つのものであったころ、先生は教育思想史の研究に道をさだめられたのでした。

上原先生の論文「国民形成の教育」には、「人間教育」理念の形成と発展が説かれておりますが、そのなかではくりかえし、「コメニウスからクループスカヤにいたる教育の理念と思想の発展」への注目がすすめられており、これら西欧教育思想の系譜の太い軸が、「人格の主体であるはずの子どもをまさしく人格の現実の主体にまで形成しようとする〝人間教育〟の理念」としてえがかれています。私の推察するところ、社会学部の創設者たちは、若き鈴木先生に、東京高商・商科大学以来の学問の伝統にくわうるに、人間形成の社会科学的・社会思想的解明をもとめられたのではなかったでしょうか。

『一橋論叢』二十九巻六号（昭和二十八年六月刊）に先生は、「J・A・コメニウス〈大教授学〉の志向」を寄稿されています。その一節に、私は、コメニウスの志向に仮託して、先達からの期待へこたえようとした先生のおきもちを読みとるのです。

「（コメニウスにあっては）救済の望みが絶たれているのは、人類一般においてではなく、実は成人の世代においてであり、これに反して、若い世代の中には、かかる危機からは自由な・そして堕落の以前における人類の生命が、潜在的に息づいている」

「コメニウスにとっては、人類は、成人の世代と若い世代とに分けられ、両者は、それぞれ、人類の堕落と人類の自然とを表わすものとして、したがってまた、救済の不可能性と、それの可能性とを象徴するものとして現われ、そして、若い世代の中にある・人類の原型を発展せしめるもの、換言すれば、若い世代において人類の救済の可能性を現実性に転化せしめるもの、それが教育である、とされることによって、彼の中にある・人類の救済への断念と、しかしそれへの憧憬との矛盾が自ら解決への道を見いだした、と言いうるのではあるまいか」

ここにコメニウスの志向としてかたられているものは、社会学部創設期における先生ご自身の志向であった、と私は考えるのです。

それから三十年ののち、一昨年、先生は、『コメニウス〈大教授学〉入門』を上梓されました。先生はこのご著書のなかで、くりかえし『大教授学』を味読するよう読者にすすめられ、その理由をこう述べておられます。

「現在、私たちの国で、国民学校教育というものが、ともすればルーティンに堕し、教育にたいして思想と理論とをもってのぞむことがなく、はなはだしきは、教育が、世俗の利益をえる手段と化している情況を、打ち破り、また、私たち国民と人類との絶滅を招かずにはいない核戦争への道を盲進する政治権力による教育支配と、教師・親による子ども支配と、この、二つの支配によって、日本の教育が危機に瀕している現状にあって、この支配を拒絶し、これに抵抗し、私たちの国民教育を建設する上に、大きな力の一つになるものと、信ずるからである」

先生が現代日本の教育について触れられた文章は、右の行文以外に私は拝見しておりません。しかし、思想の根源をきわめんとする先生のご研究が「私たちの国民教育の建設」の志向に根ざしていたことを、私たちは知るのです。根源にさかのぼる思想史研究が、根源的に現実的であることを、私たちは先生からまなぶのです。

コメニウスの思想を一点に収れんしたあの『大教授学』には先生の訳業になる次のような別名が付されていました。

「都市および村落のすべてにわたり、男女両性の全青少年が、ひとりも無視されることなく、学問を教えられ、徳行を磨かれ、敬神の心を養われ、かくして青年期までの年月の間に、現世と来世との生命に属する、あらゆる事柄を

僅かな労力で　愉快に　着実に
教わることのできる学校を　創設する・的確な・熟考された方法」

この金の文字は、いわゆる偏差値にもとづく現代日本の教育を根底から批判するものではないでしょうか。

そればかりではありません。今日、内閣直属による「教育臨調」の名による教育の政治支配が声高に論じられておりますが、いまだからこそ、私たちは『一橋論叢』第四十一巻第五号（昭和三十四年五月刊）に寄せられた論稿「コンドルセと教育の独立」にたちかえってみる必要があるのです。先生の御指摘によればコンドルセ

のいう「ソシエテ・ナシオナル」は

「第一に、科学者の〈共同理性〉の形成者であり、第二に、教育の本質をなす真理の・第一の判定者であり、第三に、公教育が接近するべき・叡智の極限を、真理の無限系列の産出者としての自己の活動過程において、措定するものであり、このような自己活動によって、公教育の設立者である公権力から公教育を切断するにたえる自立性と自足性とを確立し、こうして公教育の成立そのものを初めて可能にするものであった」

のであります。二つの支配によって日本の教育は危機に瀕しているという先生のご診断は、「教育臨調」の低い志と「ソシエテ・ナシオナル」の高い理想の対比において、もっとも明瞭になるでしょう。

先生の畢生のライフワーク、『エミル』分析のお仕事について、もはや何もつけくわえるものはありません。ただ一つだけ、根源にさかのぼる思想史研究が根源的に現実的であることを私たちにしめされた点を申しあげておきましょう。

現代学校の基本問題は、荒廃した学校のなかに、生徒同士のなかに、教師と生徒のなかに、〈共に生きる〉感覚と経験と理念をとりもどすことにあると私たちは考えてきました。共生・共感・共鳴・共働――およそ、これら、「世俗の利益をえる手段と化した」教育の中から失われた人間・子ども・青年の共同性の核心はどこにあるのでしょうか。それは、荒れた学園再生の根本命題です。

先生のご近著『〈教育〉と〈自然〉――ジャンージャック・ルソ「エミル」の一研究』本論第七節に、まさにそれが説かれています。先生は、ルソの「人間を、結びあうことのできるものにするものは、人間の弱さである。私たちの・共通の惨めさこそ、私たちの心を、思いやりへ導いていくものである」との一節を引かれて、人間の、とりわけ**青年の生における共同性**の根源をあきらかにしておられます。

「〈私たちを他人と同化させる〉「心像描出力」をうちに含む「感受性」が、他人の「感情」「情念」にたいする・私たちの「感情」「情念」を生じさせる、という関係をルソがとらえたことは、アダム・スミス『道徳諸感情の理論』における・「同感」の構造把握とまったくひとしい」

というのが、先生の結論でした。先生によれば、ルソに

とって「未来社会は、もはや、〈身分〉〈階級〉〈富〉によっては蔽われることのない〈まる裸〉の〈人間〉、〈共通の惨めさ〉の中にある〈人間〉のみが形づくるものであり、それゆえに〈自分の同類にたいする愛〉〈思いやり〉なくしては〈人間〉が生きることのできない、新しい〈社会秩序〉である」のでありました。かつて「コメンスキーとルソ」という卓越した論稿をあたえられた私たちは、こうしていままた〈ルソとスミス〉という命題をあたえられることとなったのです。

うっそうたる森のような、樹海のような鈴木先生のお仕事にしめされた学風が、正統な一橋大学の先達の学問を継承した厳密で重厚な考証につらぬかれていたことはいうまでもありません。しかしそれにとどまらず、旧来の社会科学からは未知の領域を探究する独特の思考、一つの思想と一つの思想の内在関連をおいつめていく錦を織る様なお仕事こそ先生の本質でありました。したがって、ひろい社会思想史のご研究から教育思想史の分野にすすまれた先生は、教育価値の歴史的形成過程を厳密にあとづけられただけではないのです。教育学研究プロパーの人たちのよくなしえなかった教育思想と社会思想のマージナル・テリトリイの探究をきわめられ、教育思想をひろく社会思想史研究・社会哲学研究の文脈のなかでとらえなおす独自の教育学、前人未踏のいわば「教育社会思想史」を先生は確立されたと私は考えるのです。最終講義の副題や〈ルソとスミス〉問題はその例示といえましょう。そして、それこそは、かつて、社会学部の創設者たちが若き鈴木先生に期したものだったのではないでしょうか。

先生のご退官は、私たちにとってとうてい埋められない空隙をうみだすでしょう。しかし、ご指導いただく機会はこれからもどこにもあります。さいわいようやく一橋大学の内部に、国立市民むけ公開講座の機運も芽生えてきました。学生・教官・市民ともども先生にお教えいただかねばならぬことは山積しております。

どうか先生、くれぐれも健康にご留意あって、今後旧に倍するご教導をたまわりますように心からおねがいいたします。以上をもちまして、先生の積年のご労苦への謝辞といたします。

（一橋大学教授）

（本稿は、一九八四年二月二日、鈴木教授退官講義のあと、その席上で呈せられたものである）